

勸化の旅

明治三十五年は主として関東を巡教された。埼玉県桜井村の倉常寺にも、その檀徒なる剣士岡安氏と旅先で知りあいになられし因縁によりて、村に巡錫、寺に数日間結縁された。

火伏せ竜

倉常寺より一里の東、宝珠花という所にかねて上人に帰依していた中島という米穀問屋あり。ある年大火ありて村中が焼けて四隣の家々みな焼けたのに、ただ中島家のみ一軒焼け残った。ところがかねて上人より頂いた火伏せの竜（竜の字を竜の形に見えるようにくずして、一氣に書ける一筆の墨痕躍動せるもの）を探すと、もとあつた所はもちろんのこと、どこにもない。なおあちこち探すとその火伏せの竜の紙片が家の外に飛んでいて大分焼けていた。このことあつて以来、近村の人々みな上人の火伏せの竜を争い望むようにかねがねなつていたので、倉常寺では近村からまで人出があつてきそつて上人をむしろ拌みにきた。

上人は子供を集めて阿弥陀經に節ふしをつけて読んで教えられるので、住職中島靈真師（師は洋服着用で寺を学校にしていた）は子供に阿弥陀經はわかりますまいといえば、上人は「かつて京都で新島襄氏と会見したさい新島氏は、「仏教では老人のみ相手にするが、老人はすぐ亡くなる、



耶蘇教では少年から仕込むといっていた」と、聞いた話にしてやわらかく、少年結縁のきわめて大事なことを懇々ことごとくと話された。

その頃化導の縁にあいし人の多くの中の一例をあぐれば、東京府下砂村の鈴木玉吉氏は初め弘法大師を信仰し、府内八十八ヶ所を巡礼していたる所のお寺で、お大師様に向い「どうか真の善知識にお出会いさせて下さるよう」にと念じていた。ある日巡拝の帰り道に、ある在家で説法している出家があるのに、ふとした縁で参詣し承っていると、世間のことや因縁話は一口的にいわれず、初からしまいまで如来様のお話ばかりであつたのにまず打たれ、その出家のいか

にも尊い人柄に帰依の思いをなして、私を救い下さる善知識はこの方だと心にきめてしまった。その出家はすなわち上人であつた。

それから上人に念仏三昧の法を授かり、年をかさねて精進に修行した。

ある時自宅の一間に閉じこもり、ご飯は室の隅に置かせるだけで家人とも口をきかず、幾日間を念仏三昧を修行した。何等靈驗もなかったが、おかげでかく念仏が勤つたことはひとえに如来様の有難いご恩と感じ、満願の期日のあと、お礼の心持で念仏していると、一心たちどころに澄みわたり、如来様とお浄土の莊嚴言語に絶し、それから生活する心持ちも一変した。それから八年ばかり上人に手を引いていただき、その後はひとり立ちで念仏していて、上人からはおたよりもいただかず、どこにご巡教になっているかは一向に知らず、(ご遷化のことも、その後人に承つて知つたようなわけで)一心念仏だけつづけていた。

日頃の事

東京では寺院はもちろん在家にも信者はまだ多くはなかったが、あればその帰依は実に深かった。日本橋材木問屋の河村氏、堀留町の紀の国屋、長谷川町の袴織物問屋高橋氏らのごとき篤信者の家にはよく(前触なく)立よられ、高橋磯吉氏方などには時に一週間以上も滞在されることは珍しくなく、朝静であるからお寝かと思つてそつと襖をあけると、床の間に向つてごく低い声で念仏しておられる。しかる後に階下の仏壇にこられて(回向のためか)一寸称名して下さる。よく木魚はあつても打たれず合掌して静に称名しておられた。

夢のおたずねをした時に「夢を見る時はもう起きていい。熟睡には夢はない。その熟睡で沢山だ」と仰せあつたが事実一寸寝^{やす}まれて後、夜中に起きていて書きものをしておられることは珍しくなかつた。

この頃は終日お滞在のお室で音もなく静かに書きもの等しておらるるだけで、強いて法を聞かして下さることはなく、お尋ねでもしないと、特に自ら進んでお説教をして下さることはなかつた。いたつて寡言沈黙な日常のお行状そのものが印象の深いご説法であつた。お言葉が低く、馴れた信者にはよく分つても、初めてのものには聞きにくかつたが、それでも晩になると店員を集めて手風琴で仏教唱歌を歌わせ、コクリコクリ寝るものを前にして諄々と静かな声で説教をして下さつた。

じみで遠慮勝ちでよろず目立つことはお嫌いであつた。それでもお経を和訳した仏教唱歌を小学等で教わる一般流行のやすい譜で教えられた。その法の歌が結構なのでなんとかもう少し一般にはやらしたいと思つた壮年高橋清次郎氏（磯吉翁の息子）は、その頃はやりたての蓄音器を持ちだし、またはやし方をつれて、五香善光寺の十夜に近村から多く人出がある機会に上人のお伴をして行き唱歌宣伝をした時には、こんな人よせには賛成なさらぬ上人も、氏がなすま



(左右両手同時運筆)

(上図の歌は次のごとし。古歌か上人作か編者は知らず)

ぬす人よけ

月と日のひかりみつれば白なみの夜の間日の間にかくれが
はなし

雨あられ雪や氷をかきあつめ火伏にむすぶ水茎のあと

火 伏

まに喜んでおられた。ずっと以前、雨を弾くためにカシユミヤ地の祇子を供養せんとしたが鼠色がなくて京浜の間屋をことごとく探した。ただ一反見つけて仕立てたこともあった。お風呂は家にあつたがあまり召されない。お食事は在家では精進料理はかえつて手がかかつて困るので、なんでもよいと仰つて家の者と同じものを召上つて下さつた。願うものにはみごとな書画を即座に書いて下さつた。その筆は頗る早かつた。

ご一生を通じてのことであるが、この頃もまたホウ齒の下駄ばきで音もせず歩かれて、決して側き目をふらず、家の中でも外でも、物静かにおちついた端然たる威儀をしばらくもくずされたことはない。常に白衣に法衣を福々しいお身体にきちんと召されて、言葉少なく声低く、新聞にある世間の出来事など申し上げても、た

だ「左様で」のしかも半ば以下は聞きとれぬように低く簡単な受け言葉だけで、一緒になつて世間話などされたことはなく、もちろん大笑大話などなされたことはない。寒中もお側に火鉢はあつても、手をかざしてあぶられたことはなく、お胸の所で組合したままにしておられる。あまり謹厳であるからその前に出ると窮屈に感ずるかといえ、そうでなく、いつもニコニコされているそのなごやかさは実に親しみが深いものであつた。

十二月下旬、東京から東海道を西下、藤枝の小西家に久しぶりに立ちよられ、年末近くには参州を巡教された。

いたる所でよく子供を集めては、手風琴で朝日かげ等の仏教唱歌をとどもにうたい、またあまねく施本にくださる阿弥陀経を、訓読で教えられた。一日百人くらいには教えらるる事もよくあつた。会の時集る人数が多かるうが減じようが、また眠ろうが、一切気にかけず、熱心に説き聞かせられた。大勢の集りよりも小人数でしんみりと論し聞かされ、ご滞在中にお訪ねしてくる人々を次々に一人づつ教化して下さつた。

お召物は供養する人の縁次第でなんでも頓着なく召され、時候はづれの粗末なものの時もあ

れば、また立派な縮緬ちりめんの祇子ぎしを着ておらるる時もあり、なんら気にも止められなかった。裾くも（袴はかまのようなもの）に祇子（四角な大袈裟に紐をつけたような法衣）如法衣（お袈裟）が不斷の服装であつて威儀をくずされることは決してなかった。

尊信する人々は生き仏様として大切にお仕え申したが、一般には、結縁ある人でも、ただ変わったお方として敬うが、真価はわからず、あまり大事にもしなかった。また上人も気軽なお振舞で何人にも気をおかせなかった。

参州岡崎の駄夫さんであつた山本氏方にもよくよられた。ある夏家の外で盥たらいで行水をしておられる時、にわか雨が降りだしたので、雨傘を持ちだしてさしかけ申すと、上人「なに裸だから結構です」。

手風琴をみづから奏でて仏教唱歌を教えらるるのを、万事旧習になづむ参州地方の寺院方がかれこれというのを、上人「この伝道形式はむしろ遅い」。

常に少年青年に結縁を求められた。集る人に米粒名号を書いて施さるる早さは、二三人がかりで包むのが間に合わなかった。ご説法中両手同時に用いて二つの名言を逆さに書き与えられ、紙屑こより、紙燃こより、爪指等で仏画を書き与えられた。

よく人の器によつてはどこそこにもつて一心念仏するようにと指図された。そんな時「何日くらいでよろしうございましょうか」と弱音を吐くと、

上人「線香の灰の落ちる音の聞ゆるまで」。

寺院方から「耶蘇臭い」とか、その他いかなる非難にあつても、

上人「なにことも如来様のお思召で」といつてあり難がつていた。

ご説法の言語に訛なまりがあり、音が聞きとりにくかったが、いかなる人にも徹底させずにはおかぬといった風に、座蒲団よりすべつて、お膝を少しずつり進めて対者あいてに近づかれる。そして上人の方から質問される。聴く方ではお尋ねをうけるのが恐くてだんだんと退りをする。

参州荻原糟谷氏方にはたびたびご滞在があり、時の老父は信仰が厚かったが若主人はまだ信心なく、それでよく一族を同家に集めて長々とご説法があつた。ある時は上人は例の通り膝を進められる。上人から質問されるのを逃げて若主人は後退りをする。熱心な上人はなおしらずしらずのうちに坐を進めらるる。かくてついに室の下手の仕切の障子の所まで若主人がさがつてしまったこともあつた。

よく人の心を見抜かれて上人から先をこしたお言葉があつた。参州願行寺で仏画を画かれて

いる時お側に侍る人、心中ひそかに「欲しいな」と思っていると、上人「まだ玩具が欲しいのですか」。

み絵像はご因縁の所に

明治三十六年（一九〇三）（四十五歳）一月、参州荻原神宮寺で無量寿經を在家衆のために十五日間ばかりご講説あり、それから吉田徳雲寺にご巡錫、二月新川法城寺にてはいささかご不例やがて五月東京浅草誓願寺にご巡教があつた。

仏画を所望する人には一々画き与えられながら

上人「これはあげますが、もしもこれを他人が欲しがったらどんな人にもあげなさい。誰が貰つて行こうが、よしんば盗人が盗んで行こうが、それはみんなお使いをして下さるので、み絵像の如来様は、ついには、そのご因縁のある所におさまつて、その人をおみちびき下さいます」。

文の趣意・聖浄裏表・大乘穿義

十月には参州に下り岡崎市外大樹寺や、真如寺にて講習會、大聖寺にて論註の講説があつた。まとまつた講義もありがたいが、上人の時に教えらるる片言隻語がうくる人の一生忘れ得ぬ金科玉条となるのであつた。随行の角岡師に、

上人「論註の觀彼世界相等の文句は読む心がその境になるためであつて、議すべきものでは

ない」。

上人「聖浄二門は裏表である」。

また大乘非仏説を主張する人に、

上人「現に飲んで功能のある薬なら、誰が発見してもよい。大乘非仏説でもよい。私も大乘非仏説とおもう」。

また仏教学者の人に向つて、

上人「出離生死の道を求めて一冊でも読んだことがありますか」。

また世間の名利のほか求めぬ人に、

上人「台所にご用ききにくる魚屋の丁稚さんが恋するのは、奥さんでもなく、お嬢さんでもない、やっぱり女中さんですね」。

上人も名誉や金は悪いことはないでしょうという人に、

上人「名利？名が欲しければ都会ばかりあるく、利ならば絵をかく」。

また「施しの気が起りてすぐあとから惜しくなる、そこが餓鬼道。飲めば（施せば）滋養になる水が火となつて飲めぬ」。

上人のように行いました人には、婦人はいかがでしょうと、露骨なお尋ねをする人におしえて上人「正宗の名刀でも火に入れるとナマクラになるものです。縁をさけねばなりません」。

不可知童子・遊戲三昧

上人が無所得子、不可知童子、書写三昧、遊戲三昧等の関防、落款を用いらるるその意味を尋ねた人に、

上人「ありがたがる向うの心もわからぬ。書いてやるこちらの心もむこうにわからぬ。それで不可知童子」。

「文殊菩薩が童子になって遊んでいると同じ、それで遊戲三昧」。

聞法に興味なきことにつきて、

上人「ポカーンとわからぬ顔をしていて結構。仏法も長者の蔵のごとく、いらぬ時に蔵にはおっておけば後に味が出る」

また「書物を読むには第一に作者の心になってその意味を味わねばならぬ」。

「仏陀禪那」号はインド帰朝後用いられしものであるが、インドにてスマンガラ師か、あるいはダンマパーラ師かに受けたるものなりという説あれど確ならず、出版文書の署名

としては明治三十八年が最初なり。